

標高2207メートルのコントロールにチャレンジ

体力派向けのスペシャルコースは根子岳山頂にコントロール、と菅平でオリエンテーリング大会があると誰かしらそんな冗談を言う。まさか本当にコントロールがおかれると思われたことはなかっただろう。

5月11日に行われた『ジャパンロゲイニングチャレンジ2003』では28チームがその根子岳山頂に設置されたコントロールを通過。その他97チームを含めた125チームが広大な菅平高原を満喫した。



今回使った地図の一部 根子岳山頂は130点が配点

男子6時間の部優勝は50コントロールのうち、29コントロールを回り1685点を獲得した柳下大選手。女子は1201点の加納尚子。混合部門は全体順位でも2位の1578点を獲得した富田吉郎、暢子夫妻のチーム「走るぼんぼりん」。50歳以上の部門では藤原三郎、3時間の部では男子が大北洋平、女子は須藤ともえがそれぞれ優勝した。

昨年の9月15日に行われた3時間のミニ・ロゲイニングでは、菅平高原でオリエンテーリングマップが存在するエリアのみが競技エリアとなっていた。また、使用された地図もオリエンテーリングの地図であったため、全く別競技というより、ロングOのようなものという感覚の選手が多かった。しかし、今回はクォーターロゲイン。競技時間が6時間と前回の倍で、常時走ることは困難。給水や栄養補給も必要。地図も国土地理院発行の2万5千分の1の地図が使わ

れる、と前回と比較すると、競技として新たな要素がいくつか加わった。

競技時間が長くなったことから、大きく競技エリアが拡大されることが予想された。しかし、標高2207メートルある根子岳の山頂付近にコントロールが設置されると予想された人は多くはなかっただろう。スタート地点は裏ダボスゲレンデのふもとで1322メートル。根子岳の山頂まで単純計算で約900メートル近い登りである。

「ロマンを求める者は根子岳に行き優勝を求めるチームは西に向かった」と混合クラスに夫婦で出場し優勝した富田吉郎。

富田夫妻は混合にも関わらず、多くの男子選手に勝ち、全体の得点でも2位だった。

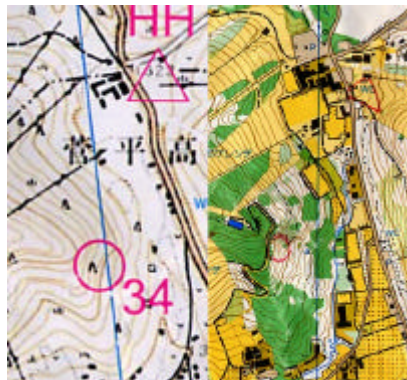
「ベアなので女子の体力を考えたら（根子岳に）行かないでしょう。とにかく最初に根子岳に行かなかったのが勝因」と勝負に徹した結果が好成績につながったとしている。

オリエンテーリングと異なりコントロールを回る順番が決められていないロゲイニングでは、作戦が大きく結果を左右する。全てのコントロールを時間内で回することは不可能な上、それぞれのコントロールに点数配分もされているので、あるコントロールに行くことが効率的なのかどうかの作戦を立てることが重要なのだ。

では、ナビゲーションの重要性はそれほど高くないか、というとそうでもない。もちろん、競技時間が6時間と長い場合秒単位のミスが大勢に影響するということはない。しかし、コントロールは意外に細かい地形におかれ、ある程度のナビゲーションスキルが要求された。

通常ロゲイニングは2万5千分の1の地図で行われ、オリエンテーリングマップほど地形表現が細かい。同じエリアを比較するとその違いは一目瞭然である。今回はオリエンテーリングマップを携帯することが許可されたが、「カンニングペーパーみたい」という声があったほどナビゲーションの差が出た。

持っていかなかったチームや、オリエンテーリングの経験がなく使いこなせないチームなどは、大きなハンディを負った。



〇マップとの同エリアの比較すると同じ場所に見えない

有力選手の一人である菅原琢は序盤にオリエンテーリングマップを紛失したため、苦戦を強いられた。女子では日本選手権優勝者の塩田美佐も中盤地図を紛失し不本意な成績に終わった。

今後の大会においてオリエンテーリングマップをどのような扱いにしているかは一つの課題である。オリエンティアメーリングリスト上でも議論が繰り返されたが、ロゲイニングというスポーツをオリエンテーリングの延長として捉えるか、それともアドベンチャーにより近いスポーツとして考えるかがポイントとなる。

今回の参加者には多くのアドベンチャーレーサーやトレイルランナーら、オリエンテーリング経験の浅い出走者も多かった。ロゲイニングをきっかけにオリエンテーリングに親しむことが期待される。

出走者は勝負に拘るものだけでなく、菅平を楽しむために出場したチームも多かった。そんなチームの多くは根子岳を目指したようである。

「今回は彼女が根子岳登りたいというから登った」とはある有力選手。

来年は12時間、もしくは24時間の競技が計画されているようであるが、四阿山のコントロールに向かう選手が多くなるのか楽しみである。

(山本英勝 hidi_o@yahoo.co.jp)